

高遠石工

〈解説文〉

「石切」と記した石工の鑑札である。高遠石工が営業免許の証として与えられたものである。

高遠石工の出身地は、藤沢郷と入野谷郷に集中していた。いりのや山間部にあって農地が乏しかったこと、良質な石材が得られたことなどによる。

① 信州伊那郡+
高遠領
片倉村

印 石切 三五左衛門

② 信州伊那郡
高遠領
水上村

印 石切 彦三郎

高遠藩は各郷の重立つた者を「石切目付」に任命し、「石切人別改帳」や「他国稼ぎ改帳」を作成させて、石工の掌握につとめた。安政3（1856）年の高遠藩の諸運上高をみると、運上金三一〇両のうち、石切運上が一一九両を占めており、藩の重要な収入源になっていた。運上は一か年に、本石切（3年間の修業を終え石工を専業としている者）が錢一貫文、作間石切（農閑期だけの石工）が三百文であった。

旅稼ぎに出る者も多く、高遠石工の名は全国に知れわたっていた。旅稼ぎ先は、信州各地・美濃・飛騨・甲斐・駿河・伊豆・相模・武藏・上野・下野などひろい地域に及んでいる。石工は定宿をもち、それぞれに石切りの持ち場所が決まっていた。

高遠石工は名前を刻まない者が多かつたが、守屋貞治は名工と

して知られ生涯に多くの作品を残している。貞治は死の直前に自

③ 信州伊那郡
高遠領
野筈村

印 石切 又右衛門
(以下略)

分の作品三三六体を「石仏菩薩細工」として記録している。その作品は信濃では伊那・木曽・諏訪・松本、他国では甲斐・上野・武藏・相模・三河・美濃・伊勢・但馬・播磨・長門に及んでいる。

【参考文献】

- ・高遠町誌編纂委員会『高遠の石仏 付石造物』高遠町誌刊行会
- ・『長野県史 通史編 近世二』長野県史刊行会